

日本棋院創立80周年記念

囲碁雑学手帳

【なぜ？どうして？これ一冊で、
あなたの囲碁世界が広がります】

もくじ

- Q 1 だが、いつ囲碁を発明したか？
Q 2 碁盤・碁石は古い道具だった？
Q 3 殷代に「碁」の文字があった？
Q 4 孔子は囲碁を知っていたか？
Q 5 古代の碁盤は17路だった？
Q 6 古代は「事前置石法」だった？
Q 7 「爛柯伝説」とは何ぞや？
Q 8 「坐隠」「手談」の意味は？
Q 9 「囲碁」「碁打ち」の別称は？
Q 10 「碁盤」「碁石」「碁笥」は？
Q 11 日本への伝来はいつごろ？
Q 12 伝来のルートは四通り？
Q 13 正倉院に棋具が11点も現存？
Q 14 皇室と囲碁の物語は？
Q 15 「学問の神様」が碁を打った？
Q 16 古代の名手はどんな人？
Q 17 「忘憂清楽集」は最古の棋書？
Q 18 清少納言と紫式部は有段者？
Q 19 算砂は三天下人の師匠？
Q 20 秀吉と家康は碁敵だった？
Q 21 家康の囲碁哲学とは？
Q 22 戦国武將の囲碁戦略とは？
- Q 23 昔はうわ手が黒を持った？
Q 24 「本因坊」の語源は？
Q 25 「名人」の語源は？
Q 26 「碁所」の由来とは？
Q 27 「御城碁」の制度とは？
Q 28 「碁聖」の語源は？
Q 29 江戸期の争碁の歴史は？
Q 30 囲碁の家元一覧は？
Q 31 「ダメの妙手」とは？
Q 32 「耳赤の一手」とは？
Q 33 江戸の碁会所風景とは？
Q 34 江戸の碁盤店の様子は？
Q 35 囲碁免状の歴史は？
Q 36 「コミ碁」はいつから？
Q 37 「新布石」の創始とは？
Q 38 「名人引退碁」とは？
Q 39 吳清源の来日と活躍は？
Q 40 海外普及の黎明について？
Q 41 プロの名言・名語録とは？
Q 42 囲碁の格言・ことわざは？
Q 43 おもしろ術語・用語は？
Q 44 囲碁から発した日常語は？
Q 45 囲碁殿堂資料館が完成した？

はじめに

平成十六年秋、日本棋院の創立80周年記念行事の一環として、囲碁殿堂資料館が創設されましたが、囲碁の歴史・文化などについての「素朴な疑問」と回答を集めたこの小冊子は、まことにグッド・タイミングな企画となりました。

囲碁の世界はますますグローバル化してきましたし、ファン同士の交流や入門・初心者に接するチャンスが少なくありません。そうした機会が増えれば増えるほど、囲碁の歴史や文化に関する正しい情報や知識の「厚み」が大きな効果をもたらします。

棋士・院生・普及指導員は無論のこと、各地のカルチャーセンターの講師や入門・初級者の拡大を目指す方々に役立つように編集しました。

読後には、この小冊子をしまい込まず、周囲の人にも回して読んでもらうことをおすすめます。

(構成・水口藤雄)

Q1 だれが、いつ囲碁を発明したか？

「オセロ」は一九七二年（昭和四七）、日本の長谷川五郎さんが考案した新しいゲーム。一方、兄貴分である「囲碁」の歴史は、少なくとも数千年という長い年月をさかのぼる古いゲームです。

中国には、「囲碁四千年」という言葉があります。中国には、確たる証拠は見当たりません。いわば黄河流域の古代文明の黎明期と同じころ、すなわち人類の文明や歴史の曙時代の発明？とされています。

あくまでも伝説ですが、中国の堯帝（伝説上の聖王）が考案したというのです。丹朱（たんしゅ）という息子があまり賢くなかったので、囲碁によって賢明な皇帝に育てるのが目的でした。

ところが、堯帝は庶民出の舜（しん）を次の皇帝に定めしました。ということは、丹朱には囲碁での教育に成功しなかった、ということになりました。どうか。

さて、現代の日中プロ棋士の一部には、「こんなに面白いゲームは人間ではなく、神様が発明したとは思えない」と信じている人もおります。

何分にも、数千年前の太古からの話ですから、仙人や神様が登場しても、あながち不思議ではないでしょう。

Q2 碁盤・碁石は占いの道具だった？

文明が未発達な古代においては、自然の営みや社会生活の仕組みの基準を占いによって定めようとなりましたが、ここでもう一度、堯帝に登場してもらいましょ。かれは碁盤や碁石を道具として占いを行い、天下を治めたという説があるのです。

現代の標準碁盤（19路盤）でいえば、三六〇の交点是一年の日数を表し（真ん中の星は天元ないし太極と称します）、碁盤を四等分して四季を示していたと考えられます。

また、白石は昼（陽）を表し黒石（陰）は夜を表しましたが、堯帝は占いや八卦をつかさどる皇帝だったというのです。



堯帝（伝説上の聖帝）

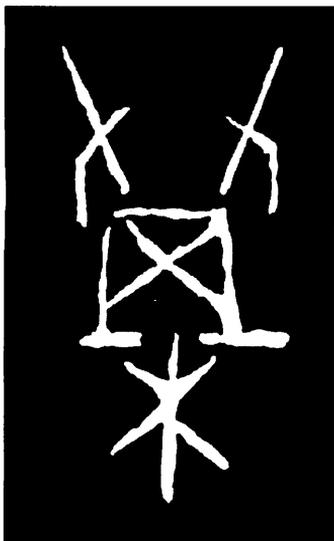
Q3 殷代に「碁」の文字があったか？

「碁」という文字は、碁の古代語です。さて、この文字がいつごろから世に現れたかという点、中国の殷代（前一六世紀―前一一世紀）と思われる。

この時代の甲骨文とは、動物の骨や亀の甲羅に刻まれた古代文字ですが、占いや易の記録を残したものとされています。数ある甲骨文の中に「碁」という文字が一つだけ、ある辞書に載っております。

ただし、この文字が現代で言うところの囲碁ゲームを意味していたのか、あるいは地名なのか、はたまた別の意味なのかは諸説あって迷います。

ファンとしては、ともかく囲碁を表す文字であってほしいと願うばかりです。



甲骨文の「碁」

Q4 孔子は囲碁を知っていたか？

春秋時代の思想家である孔子（前五五―前四七九）が、はたして囲碁を知っていたかという点は明確ではありません。ただし、孔子の弟子たちが著した「論語」の中に「飽食終日、無所用心、難矣哉、不有博奕者乎、為之猶賢乎己」（腹いっぱい食べて頭をはたらかせることなく無為に日を過ごすよりは、（盤）双六や囲碁でもしているほうがまだましである）とあります。

この文章の真意を探ってみると、孔子は囲碁を知らないわけではないことが分かります。といっても心底から礼讃しているほどでもなく、双六や囲碁はたんなる暇つぶしの道具に見立てているにすぎません。孔子はかつて、囲碁に熱中して失敗した経験があったのかも知れません。

孟子（前三七二―前二八九）も囲碁について述べています。「孟子」には「今夫弈之為数小数也、不専心志則不得也。弈秋通国之善弈者也」（その囲碁の遊びはつまらない技であるが、心一つにして学ばなければ上達しない。弈秋は天下の囲碁の名人である）とあります。

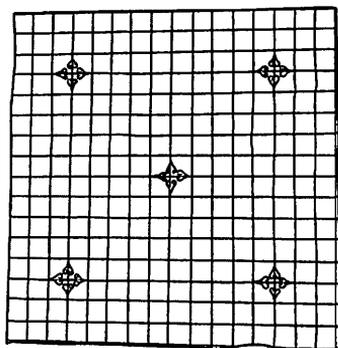
孟子のほうが、やや囲碁に堪能だったのかも？

Q5 古代の碁盤は17路だった？

一九五二年（昭和二七）、中国河北省望都県の漢代武將の墓（一八二年埋葬）の中から石製の大きな碁盤が出土しました。これがなんと17×17路の碁盤だったのです。

邯鄲^{かんたん}淳^{じゅん}という人物が「芸経」という本に書いていた「碁局縦横各十七道、合わせて二八九道」という文章が、はからずも、この現存最古の石製の出土により立証されることになりました。

左の図をよく見てください。17路であることは無論ですが、いわゆる星（中国では花点）の形がハートというロマンチックなもので、九つではなく五花点。古代から約二千年間も五花点の碁盤でした。

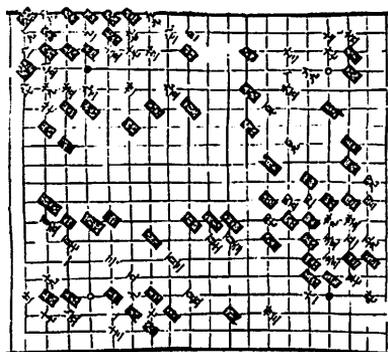


石製碁盤の写し
「花点」が五つ彫り込まれている

Q6 古代は「事前置石法」だった？

前述のとおり、漢代の碁盤は「17路五星盤」だったことが知られます。つづく隋代以降になると「19路五星盤」に変化していますが、今から百年ほど前までの長い間、ずーっと五星（花点）のままだったということですが。

その碁法、様式は「互先事前置石法」といって、対局前に四隅の相對する星（4の四）に白黒各二子を交互に置き合い、そして、第一手から打ちはじめるといいます。日本人から見ると、奇異に思われますが、少なくとも二千年以上もつづいた碁法はそれなりの根拠があつたはずですが。



初めに白黒二子を置き合ってから打ち
はじめる事前置石法 【恋愛酒楽集】より

Q7 「爛柯伝説」とは何ぞや？

爛柯は〈らんか〉と読みます。爛は腐る・ただれるという意味があり、柯は斧の柄の呼称です。すなわち、「斧の柄が腐り果てる」というのが、この雅称のいわれ。晋代の伝説（『述異記』）です。

ある時、王質という樵が山中で四人の童子が碁を囲んでいるのを眺めているうちに時の経つのも忘れ、気が付くと持っていた斧の柄がすっかり腐りはてていました。おどろいて家に帰ると、人々はみんな死んでいなくなっていた、という故事から。

それほど魅力がいっぱいである、と囲碁を謳歌していることになります。



王質爛柯図

Q8 「坐隠」「手談」の意味は？

長い歴史の中で、囲碁には多くの異称が生まれました。太古の昔は「弈」とか「碁」とか書かれていましたが、魏から晋の時代（二二〇―三一六）にかけて「坐隠」「手談」という別称が広まります。

『世説新語』（劉義慶）という書物に「王中郎は圍碁を以て是れ坐隠となし、支公は圍碁を以て手談と為す」とあります。

「坐隠」とは漢代以降、戦乱をきらった知識人たちが世俗の雑事から逃れて田舎に隠遁し、自由な談論や清談に明け暮れた生活を営み、時に囲碁を囲んだことから出た雅称です。

「手談」とは、碁を囲むのに言葉は必要なく、もっぱら盤面に集中して手を読み、一手一手の意味するところを推理し、予測し、判断することから、あたかも「碁石による会話」を楽しむかのような雰囲気がかもし出されることをいい、これが囲碁の大きな特長であります。

外国人相手でも同じで、言語・国境・年齢・性別に関係なく、だれとでも、いつでも、碁盤と碁石さえあれば、お互いの意志が通じるということの意味します（近年はインターネット対局が盛んです）。

Q9 「囲碁」「碁打ち」の別称は？

爛柯・坐隠・手談などの古称からはじまって、長い歴史の中でじつに多くの別称、異称が生まれております。

ほぼ定着したと思われるものを表にまとめてみました。あなたは、いくつ知っていますか？

<p>〈囲碁の別称〉</p> <p>弈・碁・棋・奕碁(棋) ・博弈・碁(棋)博・爛柯・忘愛・坐隠・手談 ・烏鷲・黑白・方円・清楽・清遊・清戯・聖技・仙技・局戯・斧の柄・腐斧・橘中の楽・囲碁(棋・碁)・君子のたしなみ・碁・碁碁</p>	<p>〈碁打ちの別称〉</p> <p>枰之客・橘中の仙・仙子・弈者・善弈者・棋待士・碁(棋)碁客・棋侶・碁(碁)敵・碁隣 ・棋(碁)工・碁之者・碁打ち・碁打人・碁擲 ・碁(棋)碁家・碁士 ・棋伯・棋士・碁仙・碁人・碁友・碁仲間・囲碁ファン・囲碁愛好者</p>
--	--

Q10 「碁盤」「碁石」「碁笥」は？

碁盤・碁石・碁笥も同様に、多彩な別称が与えられてきましたが、代表的なものをご紹介します。いずれも歴史を感じさせてくれる言葉ですね。

<p>〈碁盤の別称〉</p> <p>枰(へい)・木枰・石枰 ・碁(棋)碁碁枰・碁(棋)局・囲碁(碁)枰・楸枰(しゅうへい)・弈 (碁)楸・碁(棋)碁 局・局楸(碁)碁・棋盤石(岩)・紙画局・布盤・碁(棋)盤・碁板・巴脚盤・木野狐(ぼくやこ)</p>	<p>〈碁石の別称〉</p> <p>枯木・弈子・爛柯仙客 ・囲碁子・玉碁(棋)子 ・碁・棋・碁・碁(棋)碁子・碁丸・唐石・碁(棋)碁石・雲子・雲南子・三河石・那智黒・日向石・日向蛤・本蛤・メキシコ(メキ)</p>
---	--

<p>〈碁笥の別称〉</p> <p>碁子合子・こいしげ・いごけ・奩(げ)・碁奩・棋藍・碁(碁)具・碁器・碁(碁)碁碁</p>
--

Q11 日本への伝来はいつごろ？

江戸時代の記録には、吉備真備（きびのみまきび）（六九五―七七五）が遣唐使の一員として唐から囲碁を移入したとする説がありました。現在では否定されており、真備以前、すでに多くの囲碁にかなする記録が残されていたからです。たとえば、「古事記」には碁の文字が当て字として使われ、また「常陸風土記」

「出雲風土記」には海岸でとれる碁石の記述が見られます。また、六三六年に成立した唐の歴史書「隋書・倭国伝」に日本での囲碁事情が書かれています。したがって、少なくとも六世紀、いやもっと早くて五世紀ころには倭の国（日本）に伝わっていたことも考えられます。

著標云理曲者即手潮盛蛇充中令取之云曲者即
 欽乎失人頗恬靜坐少孫賊樂有五鼓琴笛男女多
 願習燕回文身水捕魚無文字唯刻木結繩欲備法於
 百樂侍佛經始有文字知然尤信巫國每至正月一
 日必射戲飲酒其餘部里舉向好茶博握投博瀉之戲
 氣極後草木又青土地膏腴水多陸少以小墾種鴉
 項令入水捕魚自得百餘頭浴經盤粗藉以斷葉食用手
 舖之性備宜有雅風多男少婚嫁不取同姓男女相稅
 者即為婚婦入太家必先跨犬方與天相見婦人不婚妬
 死者歎以棺槨親為就寢歌舞事子兄弟以白布製履

【隋書・倭国伝】

Q12 伝来のルートは四通り？

想定される日本への伝来としては、次の四ルートが推察されます。

- 一、中国↓日本
- 二、中国↓朝鮮↓日本
- 三、朝鮮↓日本
- 四、チベット地方↓日本

いずれも現状では、断定するに足る資料や証拠は見つかっておらず、否定する材料もありません。

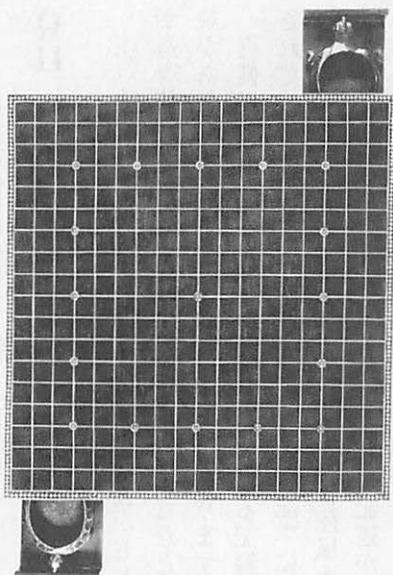
ただ一つ言えることは、百済（くだら）の義慈王（ぎじ）（在位六四一―六六二）から藤原鎌足（かまたり）あてに碁石（ばちるのきし）（撥鏤碁子）と碁石入れ（ぎんへいだつこのうす）（銀平脱合子）が贈られていたことが「東大寺献物帳」（国家珍宝帳）に記録されています。から間違いありません。ただしこの時、「木画紫檀碁局」（専用の碁盤入れ「金銀亀甲瓮」に収められていました）一面とともに三点セットとして同時に送られてきたことは、ほぼ断定できそうです。

ようするに、真備が唐から帰国する前、すでに日本では盛んに囲碁などの遊びが盛行していたことは事実でしたし、また古代において、すでに囲碁による国際交流が活発に行われていたことは、まずもって痛快事と言わなければなりません。

Q 13 正倉院に棋具が11点も現存？

シルクロードの終着点である奈良の正倉院に、国宝の碁盤や碁石などが一二〇〇年もの長い間、大切に保存されてきたことを知っている囲碁ファンは多くないと思います。「木画紫檀碁局」と名付けられた華麗な碁盤が人気度でベスト5に入るといふことまで知っている人は、もつと少ないでしょう。

その他の棋具は別表のとおりですが、「桑木木画碁局」の二面は、おそらく和製であろうと言われております。見るからに日本製を思わせる渋い？造りなのです。



「木画紫檀碁局」
(平面図・引き出しはアゲハマ入れ)

正倉院の棋具一覧(国宝)

上図の碁盤に「17花点」あるのがわかりますか？
すなわち百済の「事前置石法」の碁法を示す碁盤。
左の表は、聖武天皇愛用の棋具一覧表。*印は百済の義慈王から藤原鎌足への贈り物でした。

碁盤	木画紫檀碁局 <small>もろがしたんのききよく</small>	碁石	黒碁子* <small>くろきし</small>
碁盤	金銀亀甲盒 <small>きんぎんきつこうのがん</small>	碁石	白碁子* <small>しろきし</small>
容器	(木画紫檀碁局の収納箱)		(石英)
碁盤	桑木木画碁局 <small>くわきもくがのききよく</small>	碁筒	銀平脱合子* <small>ぎんへいだつごうす</small>
碁盤	桑木木画碁局 (紫檀加里武荘)	碁筒	金銀絵碁子合子 <small>きんぎんえきしごうす</small>
碁石	紅牙撥鏤碁子* <small>こうげばちるのきし</small>	楽器	桑木阮咸 <small>くわのきげんかん</small>
碁石	紺牙撥鏤碁子* <small>こんげばちるのきし</small>		(囲碁図)

Q14 皇室と囲碁の物語は？

「皇室と囲碁」の関係については、古来より密接に結びついてきた、と断言できます。前記の正倉院宝物の棋具類の存在が何よりの物証です。

これより三、四世紀さかのほれば、すでに大和朝廷は朝鮮半島、とくに百済王朝との交接を通して、あらゆる文化の摂取にとめてきましたし、一方、中国の王朝（晋・宋・齊・梁・隋・唐）との交流も活発で、むろん、囲碁外交も盛んでした。

国内における天皇と囲碁の記述は、『水鏡』にはじめて表れます。光仁天皇（在位七七〇—七八一）がひよんなことから、井上の后と美男、美女を賭けて碁を打つ場面が描かれています。これより四十年後、仁明天皇（在位八三三—八五〇）の時代、皇室における「囲碁の催し」が活発になります。『続日本後紀』に「天長十年三月、天皇紫宸殿に御し、群臣に酒を賜り、囲碁の興あり。終わって親王以下に御衣を賜り、各差有り」と書かれ、これより数年間にわたり同様の記事が見られます。紫宸殿はまるで囲碁サロンの趣を呈していました。醍醐天皇の時代も同じような催しが何年もつづきました。

Q15 「学問の神様」が碁を打った？

「学問の神様」として有名な菅原道真（八四八—九〇三）は囲碁の詩を四つ書いています。

一死一生争道頻 一死一生道を争うこと頻なり
手談厭却口談人 手談 厭却す口談の人

殷勤不愧相嘲哂 殷勤に愧ぢず相嘲哂することを漫説當家有積薪 漫しく説く、当家に積薪ありと

二八歳のときの詩ですが、「手談」「積薪」（中国の名手）など、中国の古典にも詳しいことが分かります。やがて、さまざまな官職をのぼりつめ位人臣をきわめました。絶頂期に政敵らの陰謀によって大宰府へ左遷されました。後年、遺跡から数百個もの碁石が出土しましたが、道真が悶々として過ごした日々を慰めた碁石だったのかも知れません。



菅原道真

Q 16 古代の名手はどんな人？

さきごろ一大ブームをもたらした「ヒカルの碁」に登場する「左為」は、平安期の名手だったという設定でしたが、その当時、遣唐使の一員として弁正という僧侶が入唐したさい玄宗（まだ皇太子だった）に召されて碁を打った話とか、伴宿弥少勝雄および十余歳だった紀夏井が、碁師として唐に渡った記述が見られます。

宇多、醍醐両天皇に囲碁をもつて仕えた寛蓮（俗名・橘良利）は、日本初の「碁聖」の称号がある殿上人。醍醐帝（寛蓮に二子のハンディ）と賭碁のエピソードがあり、また、帝の勅命で日本初の『碁式』（原書は不明）という啓蒙書を献上しています。



変化の佳人と対局する寛蓮

Q 17 『忘憂清楽集』は最古の棋書？

現存最古の棋書として、従来から著名なのが『忘憂清楽集』です。編者は李逸民。仙人と王質（伝説上の樵）の爛柯図、後漢の武将孫策・呂範局などが収録されており信憑性が薄い棋譜もあり、いわゆる遊びか余興の域をでない部分もあります。

北宋の徵宗（在位一一〇〇—一一二五）時代の成立ですが、あまり離れていないころの棋譜なら信頼性が保たれそうです。時代はくだりますが、元代の『玄玄碁經集』は、最古の囲碁百科事典とも称すべき立派な内容の棋書。詰碁も秀逸です。



『忘憂清楽集』（平成16年 講談社刊）
（題金は後世のもの）

Q18 清少納言と紫式部は有段者？

平安時代の二人の才媛が、いずれも囲碁に興じていたことは、囲碁ファンの間ではかなり知られたってきたと思います。

『枕草子』『源氏物語』には、それぞれ囲碁にかんする描写が随所にてきます。そして、術語や用語の使いかたが当をえていて絶妙をきわめております。とうてい、生半可な知識とは思えません。



図1 『源氏物語絵巻』の囲碁図
(宿木一から)が切手になった(1989年)

同時代の二人がじつさいに対局したかどうか定かではありません。対照的な性格だったといえますから、けだし見物みものだったことは間違いないと思います。実現していれば、どちらかが日記などに書きしるしていたことでしょう。

図1は、一九八九年(平成1)に発行された記念切手(『源氏物語絵巻』(宿木一)から)。(竹河二)とセットで発売されましたが、『源氏物語』と囲碁についてこれほど端的に、しかも抜群のPR効果が表われる方法は多くはありません。切手は「小さな外交官」と言われます。国際普及にとつて、ますますはすみがついたことは勿論でした。



図2 「十帖源氏」(野々口立甫画)

Q 19 算砂は三天下人の師匠？

初代本因坊算砂は三人の天下人（織田信長・豊臣秀吉・徳川家康）に囲碁で仕えましたが、人柄、識見が優れており、「軍師」に迎えられたようです。

算砂は京都に生まれ、八歳で得度して日海を名乗り、寂光寺の塔頭「本因坊」で修業を積みました。碁の師匠は堺の仙也。十九歳のとき、信長に召され「名人」とたたえられた話があります。秀吉主催の全国大会で二度優勝し、自他ともに認める碁界最高の実力者に。

天下人が囲碁をたしなめば、おのずから大名や武将などが見ならうのは道理であり、囲碁は大いにもてはやされ今日の繁栄につながりました。



本因坊算砂

Q 20 秀吉と家康は碁敵だった？

名だたる二人の天下人が烏鷲を闘わしたという伝承のある、碁盤が二面存在しておりました。

一面は、水戸の徳川博物館所蔵の「舞葡萄の盤」といって、櫃の木の根っ子の部分を木取りした珍しい斑紋のある銘盤です（通常は未公開）。

もう一面は、つい先ごろまで京都の著名な寺院で公開されておりましたが、何と盗難に遭ってしまいました。平成十六年秋、日本棋院に創設された囲碁殿堂資料館のオープンに際して、ぜひ展示してほしい珍品でしたが、不届き者のため夢は破れました。



伝・秀吉と家康対局盤

Q21 家康の囲碁哲学とは？

昨年(平成十六年)十一月十五日(いい囲碁の日)、日本棋院に囲碁殿堂資料館が創設されました。

栄えある第一回の殿堂入りを果たした四人のメンバーの中に、徳川幕府の創設者であり初代將軍の徳川家康(一五四二—一六一六)が選ばれております。他の三人は初代本因坊算砂・四世本因坊道策・本因坊跡目秀策とすべて江戸期の著名な棋士でした。

日本の「準国技」と称すべき野球の殿堂は何年も前に設立されていますが、選手ばかりでなく関係者が多く選ばれています。囲碁界も見ならつて選手(棋士)以外からも選んでおります。



徳川家康

天下人のなかでも、とくに家康は囲碁への思い入れが強く、それだけに対局にまつわる面白いエピソードを数多く残しております。そればかりではなく、家康は囲碁・将棋などの棋士や芸術家を保護し、相談相手にしたり重い役職に登用していました。算砂は南光坊天海と並んで家康の「軍師」を仰せつかったという話もあるくらいです。

そのうえ、家元・碁所・御城碁などの基盤を築き上げた恩人でもあります。「家康がいなければ、(日本の囲碁は)すべてが始まらなかった」という棋士がおりましたが、まったくそのとおりであります。

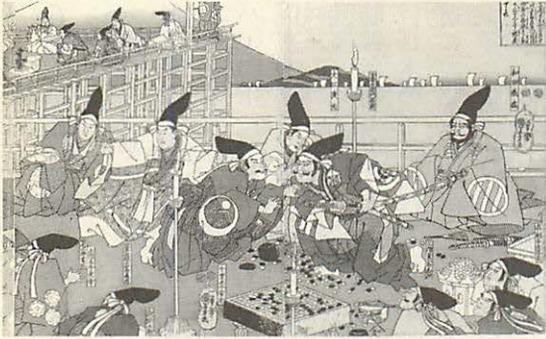
江戸からはじまった日本の囲碁の優位性を世界に知らしめるという、大事業を成し遂げたのが家康であり、また、その遺志を継いだ代々の將軍が江戸時代の大半の期間(二三〇年間)、囲碁・将棋を保護、奨励してきたのが実状です。

算砂・道策・秀策をはじめとする多くの棋士の存在についても、家康が囲碁界に対してもたらした功績があったればこそと言えましょう。

家康が「囲碁は日本の国技」と言ったかどうかは定かではありませんが、中年にして囲碁を覚え、その魅力や効用を生涯にわたって享受し、人にも勧め碁友・碁敵との交流から多くの人脈を構築し、あまつさえ、天下を取った幸せな囲碁人でした。

Q22 戦国武将の囲碁戦略とは？

中国においては「囲碁は兵法なり」とみなされた時期がありました。日本においても「囲碁は戦略・戦術の具なり」と信じられた風潮がありました。「義家が日本の囲碁史上に名前を伝えられる最初の武人」（渡部義通）と書かれた源義家（一〇三九—一一九九）は武勇に優れ、そして、囲碁をたしなんだ武将でした。

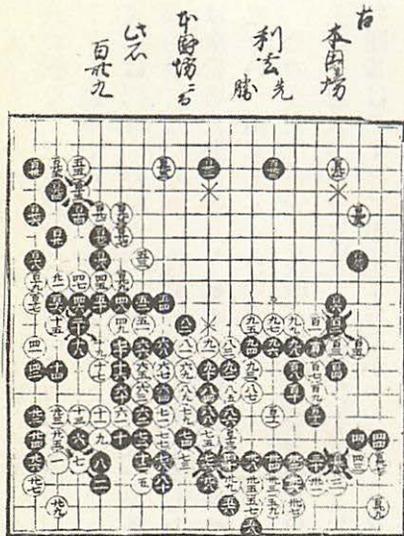


頼朝の御前碁会のいざこざを描いた浮世絵（歌川国芳画）

鎌倉幕府を開いた源頼朝（一一四七—一一九九）も囲碁にちなんだエピソードがあり、弟の義経の家臣である佐藤忠信が碁盤を武器がわりにした武勇伝や弁慶が碁の助言した逸話も。信州上田城主の真田昌幸の川中島や関ヶ原合戦での逸話は有名です。

Q23 昔はうわ手が黒を持った？

古代中国では、黒（玄）を天の色ないし奥深い色と考えられており、「幽玄」という言葉はここから出ています。黒衣（黒い着物）は貴人が着用するもの。「白衣」は無位無冠の平民の服で、「白人・白丁」とは普通人を意味します。したがって、中国ではした手が白を持ち、うわ手が黒を持つしきたりが長い間つづきました。つい百年前くらい前から、日本式に白と黒が逆転したと言われます。日本も四百年前ほど前には、「第一手白」の碁が二十数局残されています。図は算砂に利玄が白番第一手の碁。



第一手白の棋譜が二十数局のこっている
（『中古名人碁経』より）

Q24 「本因坊」の語源は？

現代の「本因坊戦」は、もともと古く伝統のあるタイトル戦の名称です。

この語源ですが、囲碁界中興の祖と言われる算砂の出自、寂光寺で修業時代をおくった塔頭の一つ「本因坊」から出ています。ちなみに、他の塔頭とともに現在の寂光寺には存在しません。

徳川家康の時代に囲碁の四家元が設けられました。本因坊家は代々にわたり囲碁界のリーダーシップを発揮し、また、十名の名人のうち七名、碁所八名のうち五名が許されており、算砂は江戸時代は「ほんにんぼうさんしゃ」と呼ばれ、日海は「ちかい」と呼ばれておりました。



世襲制最後の本因坊秀哉

Q25 「名人」の語源は？

一般的な「名人」の語源は、どの辞書でもはっきりしません。囲碁界では、織田信長が十九歳の日海を引見したさい、「お前は名人の技量がある」といった言葉が語源と考えられております。

算砂から大正初年まで、十人の名人が官命・推薦・争碁などによって決められています。道策のころからは名人は九段と定められました。

名人と碁所とは別個の基準で定められます。

歴代名人 名人 碁所

初代	本因坊算砂	一六〇三—二三	一六〇三—二三
井上	中村 道碩	一六二三—三〇	一六二三—三〇
二世	安井 算知	一六六八—七五	一六六八—七五
四世	本因坊道策	一六七七—〇二	一六七七—〇二
三世	井上 因碩	一七〇八—一九	一七一〇—一九
五世	本因坊道知	一七二一—二七	一七二一—二七
九世	本因坊察元	一七六六—八八	一七七〇—八八
12世	本因坊丈和	一八三一—三九	一八三二—三九
17世	本因坊秀栄	一九〇六—〇七	(19世)
21世	本因坊秀哉	一九一四—四〇	

Q 26 「碁所」の由来とは？

「碁所」は〈ごどころ〉と読みます。その職責たるや囲碁界最高の名譽と權威を有し、將軍の指南を初めとして、四家元をたばねるほか、すべての棋士の昇入段を定め、免状の発行権を独占し、御城碁の対局組み合わせ、天覧碁や海外棋士との対局など、もろもろの行事を采配しました。

碁所となるためには、囲碁界きつての実力を備えていなければならず、名人（九段）の位を有することが条件となります。

なお、囲碁界の頂点に君臨するためには、最終的には幕府（寺社奉行）の認可を得る必要がありますが、異論を唱える棋士または家元があれば、実力により優劣を決する争碁によって決着をつける方法がとられました。

地位や名譽を守るために、各家元間における技量の水準が飛躍的にアップしたことは明らかだったということもできるでしょう。

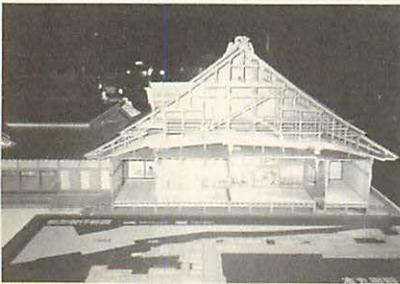
なお、盤外における権謀術数の駆け引きが少なくなかったのも事実でした。例えば、天保時代の丈和と林元美との確執はあまりにも有名です。

Q 27 「御城碁」の制度とは？

江戸時代において、毎年秋に各家元や原則として上手（七段）以上の棋士が実力と名譽を懸けて將軍の面前で対局し、心血をそそいだ棋譜を創り上げるための幕府の年中行事の一つであります。

およそ二三〇年間にわたり五百数十局にのぼる対局が行われました。江戸時代を通じて、日本の棋力水準が高められた大きな要因となっております。

国の機関によって、時の最高権力者の面前で盤上ゲームを二三〇年間も披露させるなどという行事は、世界歴史のうえで日本だけでしょう。



江戸城白書院レプリカ

Q28 「碁聖」の語源は？

「碁聖」の語源は今から千余年の昔にさかのぼります。『花鳥余情』(二條兼良編)という書物に「(橘良利)寛連は碁の上手なるにより、碁聖といえり。延喜十三年(九一三)五月三日、碁聖勅を奉じて、碁式を作りて之を(醍醐帝に)献ず」とあります。

他の者より棋力が上回っていたため「碁聖」と呼ばれた寛連のエピソードは、いくつも残っています。が割愛いたします。醍醐帝は師の寛連に二子の手合いといえますから。歴代天皇のなかでも最高の実力者でしょう。

次の碁聖(道策)が登場するまでには、およそ三六〇年の年月を要しています。



本因坊道策

近世以降における「碁聖」は、四世本因坊道策と本因坊跡目秀策の二人であることは、だれでもが認めるところでしょう。

道策は約三〇〇年前に亡くなりましたが、「実力十三段」と恐れられ、天下に敵なしの実力者でした。さらに、手割り理論と近代碁法の確立・段位制の整備・多くの俊秀を育成・元禄時代の碁界の隆盛をもたらした、など多くの事績をのこしました。遺譜は一五三局あります(『道策全集』より)。

道策より一八四年後に生まれた秀策は「後聖」とたたえられました。十一歳で初段に入品、十八歳のおり井上家の総帥・幻庵因碩に先で対し三目を余した碁は「耳赤の一手局」として著名。何よりも御城碁で19戦19連勝は前人未到の記録です。当時流行のコレラに罹病し、三十四歳の若さで世を去りました。



本因坊跡目桑原秀策

Q 29 江戸期の争碁の歴史は？

記録上初の争碁は、二世安井算知と二世本因坊算悦により行われました。名人・碁所の中村道碩が病死したため、幕府が二人に二十番の争碁を命じたことにより、九年间で六局打ち互いに黒番勝ちして碁所は一時預かり。翌々年、突如として算知は幕府から碁所に任命されました。

これに異をとなえたのが本因坊家の当主、道悦でした。「遠島覚悟の争碁」を申し入れて十二勝四敗四持碁（道悦先の手合）で終了。ややあつて算知は碁所を退きます。

これ以降幕末にいたるまで、各家元間の血みどろな争碁や盤外の駆け引きが展開されました。

江戸時代の主な争碁

安井 算知	3—3	本因坊算悦
安井 算知	4—3—4持碁	本因坊道悦
本因坊道知	3—0	安井仙角
本因坊秀伯	4—3—1持碁	井上因碩（春碩）
本因坊察元	5—0—1持碁	井上因碩（春碩）
本因坊秀和	1—0	井上因碩（幻庵）

Q 30 囲碁の家元一覧は？

本因坊家

- ①算砂 ②算悦 ③道悦 ④道策
- ⑤道知 ⑥知伯 ⑦秀伯 ⑧伯元 ⑨察元 ⑩烈元
- ⑪元丈 ⑫丈和 ⑬丈策 ⑭秀和 ⑮秀悦 ⑯秀
- 元 ⑰秀栄 ⑱秀甫 ⑲秀哉

井上家

- ①中村道碩 ②因碩 ③道砂因碩 ④道節因碩
- ⑤策雲因碩 ⑥春碩因碩 ⑦春達因碩
- ⑧因達因碩 ⑨春策因碩 ⑩因砂因碩 ⑪幻庵因碩
- ⑫節山因碩 ⑬松本因碩 ⑭天塚亀太郎 ⑮田淵米藏
- ⑯恵下田栄芳

*幻庵因碩による、中村道節を一世とする世系書き替
え後の系譜を掲出。本来は中村道碩は井上家の元祖。

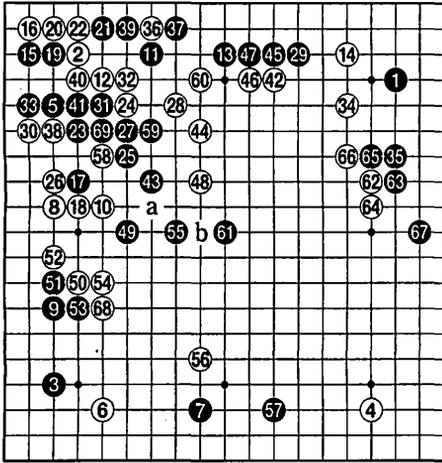
安井家

- ①算哲 ②算知 ③知哲 ④仙角 ⑤春哲仙角
- ⑥仙哲 ⑦仙知 ⑧知得仙知 ⑨算知 ⑩算英

林家

- ①門入齋 ②門入 ③玄悦門入 ④朴入
- 門入 ⑤因長門入 ⑥門利門入 ⑦転入門入 ⑧祐
- 元門入 ⑨門悦門入 ⑩鉄元門入 ⑪元美門入 ⑫
- 柏栄門入 ⑬秀栄

Q 31 「ダメの妙手」とは？

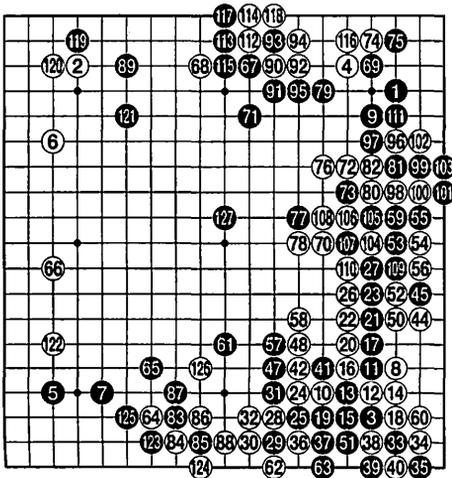


ダメの妙手局
文化9年(1812)4月

互先 本因坊元丈 (11世)
中押勝 先番 安井 知得 (跡目)

「ダメ」の定義は「地としては価値のない空点」ですが、そのダメが妙手とたたえられた碁は十一世本因坊元丈と跡目安井知得の一局。ともに名人の技量があるという著名棋士の対局で打たれました。左図の黒69が問題の「ダメ打ち」。白aのツケコシや白bのワリコミを防いだ手ともいわれますが、「(ダメを打って)一手休んで投げを催促した」という説もあります。この手を打った知得の考えを、ぜひとも聞きたいものです。

Q 32 「耳赤の一手」とは？



●コウ取る(33) ●(40) ●

耳赤の一手局
弘化3年(1846)7月

11世 井上因碩 (幻庵)
3目勝 先 桑原秀策 (18歳)

弘化二年(一八四五)十七歳で四段に昇進した秀策は広島因島への帰郷を許され、翌年、大阪に居住していた幻庵因碩と対局する機会を得ました。一局目、二子を布いた秀策の才能を感じとった因碩は、次いで向こう先で対局。中盤までだが見ても白有利と見られましたが、観戦していた医者がこう予言しました。「自分は碁を知らないが、黒127の一着を見た因碩先生の耳が赤くなり、それは黒の一着に動揺した証拠です」と。結果は黒の三目勝ち。

Q33 江戸の碁会所風景とは？

いにしへの「碁会所」は、宮廷の囲碁サロンと化した紫宸殿といえは叱られそうですが、古来より、宮廷や武将の館、豪商の屋敷そして寺社の書院などで愛好者のための碁会が多く行われました。

一般庶民にも囲碁が広まると、次第に一定の場所に集中します。たとえば、床屋・風呂屋・遊郭などに碁盤・将棋盤を置いてサービスするようになりましたが、やがてファンと席亭の利害が一致して碁会所（将棋会所も兼業？）が誕生しました。

左の図は、江戸中期ごろの囲碁・将棋会所風景。いずれも、当時の雰囲気がよく出ています。

図2はいさかいの場面のようです。

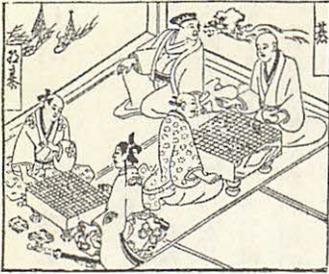


図1 『人倫訓蒙図彙』より



図2 『諸芸独自慢』より

Q34 江戸の碁盤店の様子は？

江戸前期の日記「舜旧記」に「盤屋」とか「碁盤屋」の名称が見られます。

図1 十八世紀前半の碁盤屋の作業所風景。右方はヘラで目盛りをしている職人、左は片肌ぬいでホゾ（脚をはめ込む穴）を彫っているところ。出来上がった双六盤と将棋盤が積み重ねられています（『今様職人尽百人一首』より）。

図2 百年後のイラストです。「盤目造」とありますから、目盛りの専門職人でしょう。盤端から盤端まで一気に線を引かず、四分割して漆を盛る珍しい技法（『今様職人尽歌合』より）。

現代では刀で漆を盛る技法も見られます。

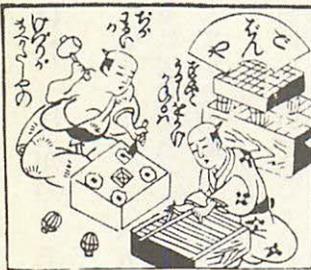


図1 18世紀前半



図2 19世紀前半

Q35 囲碁免状の歴史は？

囲碁の免状には、三百有余年の歴史があります。本因坊算砂と安井算知が発行した免状の「写し」が長野県塩尻市の旧家に保存されており、やはり、本因坊道策が天和二年（一六八二）に琉球国の濱比嘉親雲上がべいしんに与えた免状の「写し」が島根県邇摩郡の道策の生家に保存されております。発行当時の書体と体裁が同じであったと想像されます。

次いで古い免状としては道策の弟子、道知が長谷川知仙に与えた上手（七段）免状でしょう。これ以降は、時代によりそれぞれ文体は変化してきますが、二つに折った横長の大高檀紙おおたかたんしを使用することは変わりません。

純白で重厚な檀紙の起源は奈良時代だそうです。「大高」とは大判の紙を漉くことから名付けられたといえます。現代のように、皺が大きい特長は、道策らが活躍した元禄時代からです。

明治6年に、林秀栄が女流の林佐野へあてた免状の文面は平仮名交じりでしたが、それ以外はほとんどがいかめしい漢文調であります。

現在と同じ文体に統一されるようになったのは、大正十三年七月に日本棋院が創立されて以来からの

ことでした。

創立当時の理事であり、著名な政治評論家の古島一雄が従来の免状を参考にして決めたといえます。ちなみに、関西棋院も日本棋院と同じ文体だそうです。方円社の免状は、段位ではなく「級位」を採用しましたが、やがて段位に戻っております。

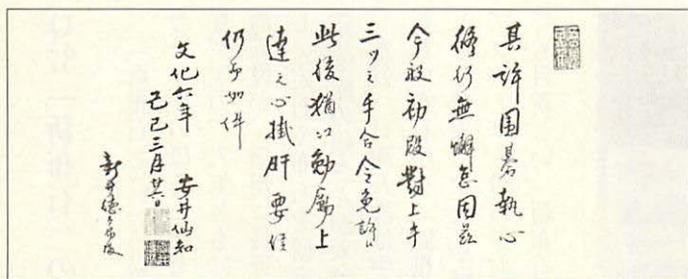


図1 七世安井仙知発行の免状

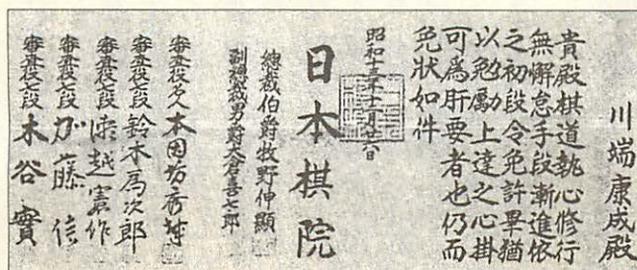


図2 川端康成の初段免状

Q 36 「コミ碁」はいつから？

昨今の互先対局では、プロもアマも大ゴミ（七目半または六目半）を採用していますが、史上初のコミ碁は天保八年（一八三七）十二月土屋秀和・竹川弥三郎（先番五目コミ）対太田雄蔵・服部正徹局（打ち掛け）の連碁と言われております。

正式の棋戦でコミが採用されたのは、初のタイトル戦として昭和十四年に誕生した本因坊戦（正式な名称は「全日本専門棋士選手権大会」。コミは四目）からでした。この当時、加藤信は「コミ碁は碁にあらず」といって忌避したと報じられました。

一九四八年（昭和二三）に創設された王座戦（日本経済新聞社主催）から「コミ四目半」が採用されましたが、昭和五十年を境として五目半に変更され、さらに平成十六年（二〇〇四）から六目半に改定されています。

大正十三年から開始された大手合では「コミ碁」は採用されておらず、平成十五年度に中止されるまでコミなし碁（昇段は点数制で決めるシステム）は、八十年近くも連綿としてつづいてきた歴史が消えてしまいました。

Q 37 「新布石」の創始とは？

「新布石」という言葉を聞いたことがありますか？
今をさかのぼること七〇年余の昭和八年（一九三三）夏、実力、人気ともにトップを走る木谷実、呉清源両五段が、信州（長野）地獄谷温泉「後楽館」で新しい定石や布石を研究したことに始まりました（後楽館の娘さんが木谷五段の奥さんでした）。

木谷、呉両五段は中央を重視、碁盤全体を使った新しい布石法を『囲棋革命 新布石法』（平凡社刊）として発表、大手合や棋戦で試み実績を示しました。プロ・アマを問わず大きな反響を呼び、現代から見ても目新しい「超布石」なども現れました。



「新布石発祥之地」の碑
長野県地獄谷温泉「後楽館」前

Q38 「名人引退碁」とは？

「不世出の名人」とか「小さな巨人」と称された本因坊秀哉（本名・田村保寿）は明治七年、東京で生まれ、十歳で方円社に入社。初段入品は九年のこのことです。

二十一世本因坊を継いだのは二四歳のとき。名を秀哉と改め八段に昇進。史上八人目の名人に就いたのは大正三年。大正十三年の日本棋院創立に尽力しました。昭和十二年にいたり秀哉は時代の流れを読みとり、また、自身の健康状態も考え「名人引退」を決意しました。

呉清源とともに実力、人気を二分していた木谷実七段と「名人引退碁」を打つことになりました。

木谷七段は名人引退碁挑戦者決定リーグ戦で優勝。盛大な打ち初め式が東京芝の「紅葉館」で行われました（東京日々、大阪毎日新聞共催）。

試合は半年におよび、合計十五回も打ち継ぐ熱戦のすえ、名人は五目負けを喫しました。この碁は両者とも死力をつくす名局で、観戦記を担当した作家（のちにノーベル賞を受賞）・川端康成の名作「名人」のモデルとなったことでも著名です。本因坊の名跡は日本棋院に移り、棋譜は毎日新聞に掲載。

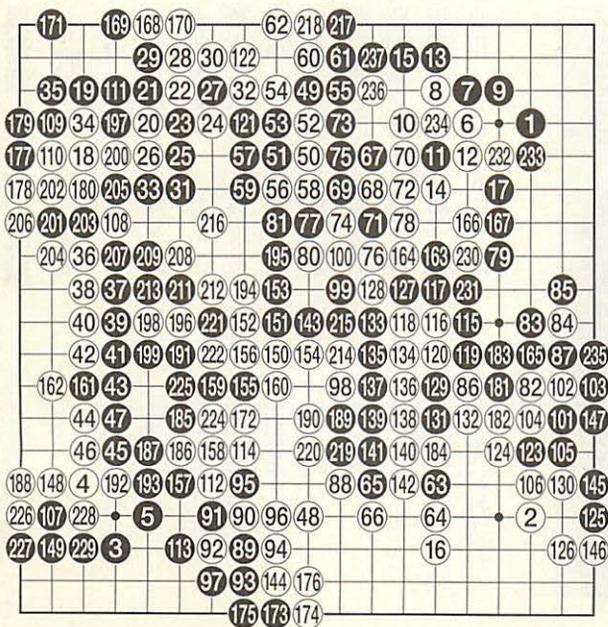
「名人引退碁」

昭和十三年（一九三八）六月二六―二二月四日

（二五回打ち継ぎ）

五目勝ち 先 七段 木谷 実
名人 本因坊秀哉

総譜（1―237）



(210) ツグ (203) (223) ♪ (196)

Q 39 吳清源の来日と活躍は？

中国国内ばかりでなく、日本においても天才少年として知られた吳清源少年（十四歳）が来日、はじめて日本の土を踏んだのは一九二八年（昭和三）の秋、十月二十日の朝。天津の塘沽から長安丸に乗船して門司港に到着しました。

同行したのは母の舒文と長兄の浣氏。創立して間もない日本棋院を挙げての歓迎を受けた吳少年は、何局かの試験碁に合格して「飛び付き三段」を許されました。嗜れて棋士として大手合に出場することになったのです。

昭和五年（一九三〇）の春季大手合は七勝一敗、年間成績は三二勝六敗二持碁を記録します。このうち、木谷実とともに日本棋院のホープとして大活躍しました。かずかずの名局をのこしましたが、とりわけ新布石法の創始にかかわり碁界に新風を吹き込みましたし、さらには、「打込十番碁」では天馬空を往くごとき快進撃をみせました。時代の強豪をすべて打ち込むという、圧倒的な強さを見せ「昭和の碁聖」と恐れられました。

現在、九十歳を超え、なおも「二十一世紀の碁」を極めるべく研鑽中といます。

吳清源十番碁の成績

〈対戦相手〉 〈吳の成績〉

木谷 実	6勝4敗	先相先に打込む
雁金 準一	4勝1敗	5局で中止
藤沢庫之助	4勝6敗	向こう先の手合
橋本宇太郎	6勝3敗1持碁	先相先に打込む
岩本 薫	7勝2敗	先相先に打込む
橋本宇太郎	5勝3敗2持碁	（第二次）
藤沢庫之助	7勝2敗1持碁	（第一次）
藤沢庫之助	5勝1敗	（第二次） 定先に
坂田 栄男	6勝2敗	定先に打込む
高川 秀格	6勝4敗	先相先に打込む



吳清源

Q 40 海外普及の黎明について？

古代日本の囲碁についての情報は、奈良・白鳳時代から散見されるようになりましたが、おそらく、中国ないし朝鮮半島から伝来して、あまり遠くない時期だったと思われます。

囲碁がアジアから欧米へ波及した端緒とは、どんなきっかけだったのでしょうか。

宮内庁御物（三の丸尚蔵館蔵）の中に一対の南蛮屏風があり、この絵の中にいわゆる南蛮人同士が鳥鷲を闘わす場面が描かれています。この屏風は徳川家康が宮中に献上した品だそうですが、少なくとも四百年前、十七世紀初頭の逸品と思われます。このほかにも、日本人と南蛮人の対局図なども数点存在しております。

ともかく日本と欧米の交流の仲立ちとして囲碁が登場する屏風だったとは、熱烈なファンであった家康は味なことをしてくれたものですね。

さて、欧米人による囲碁の紹介は、明治政府の招聘で来日した雇われ外国人の一人、O・コルセルト（ドイツ）が一八八一年（明治一四）、ドイツの技術雑誌で発表した「碁の理論と実践」が嚆矢でしょう。コルセルトは秀栄の弟子でしたが、初段の免状をも

らっています。

次いで、一八九〇年（明治二三）にはイギリスのB・H・チェンバレンが『日本事物志』で日本の囲碁を紹介しています。九年後、ユーゴスラビアのプーラで欧州初の囲碁クラブが設立されましたが、主なメンバーはオーストラリア海軍軍人でした。

欧米初の囲碁大会は一九三八年（昭和一三）ベルリンで開催された「第一回ドイツ囲碁選手権戦」。優勝者は日本への囲碁留学経験のあるF・デュバル博士でした。



「南蛮人渡来図屏風」(宮内庁蔵)

Q41 プロの名言・名語録とは？

プロの名言・名語録の一部を集めてみました。どのように受け止めるかは人それぞれですが、なかなか含蓄のある言葉も含まれております。

「凡そ碁は、己を守り、彼を攻むるにありて、大観に達するこそ、その本旨に候。ことは闘いにあるも、志は治国平天下に存すれば、智仁勇の三徳は碁の本体なり」

「勝負のみにて強弱を論ずるは愚のはなはだしきなり。諸君子、運の芸と知り給え」

「知らぬことは考えてもなかなか見えぬものなり」

本因坊丈和

「囲碁は遅いも早いも力である。へたがいくら長く考えたとて妙手の出るはずはない」

「いったい何を考えているんだ。天下の秀甫のノゾキだぞー」

「碁が自分の生命と思っているからやれるので、とても頼まれてやれることではない」

「布石の時からヨセのことを考えなきゃいけない」

「いくら碁が幽玄なものであり、どんな名人が出来たにしても、それを味わってくれる人がいないと

「自分が考えるのは気にならないけど、待つほうはつらい」

鈴木為次郎

「今日のはかりは重い」

「プロはアタリを打つときは大変悩む」

「こんな面白いゲームは、神様が創ったにちがいない」

碁は発達しない」

「碁とはなんぞや、ケンカである。ケンカは切りから始まる。碁は断にあり」

「第一手、軽率なり」

「サア、ここは百万光年考えてもわからんぞオ」

「神様と碁を打つと、十手くらいで負けてしまます」

「取られてしまった、みんなとられてしまった。石も名人もみんな取られちゃった」

「盤上に石をばらまき、そこから詰碁を考えます」

「自分が考えるのは気にならないけど、待つほうはつらい」

「今日の碁は重い」

「プロはアタリを打つときは大変悩む」

「こんな面白いゲームは、神様が創ったにちがいない」

「囲碁は、知能と人間性を発達させるすばらしい教育的手談である」

「（囲碁は）人類の考え得るもつとも面白いゲームだ」

「碁は、知能と人間性を発達させるすばらしい教育的手談である」

「（囲碁は）人類の考え得るもつとも面白いゲームだ」

「碁は、知能と人間性を発達させるすばらしい教育的手談である」

「（囲碁は）人類の考え得るもつとも面白いゲームだ」

「碁は、知能と人間性を発達させるすばらしい教育的手談である」

「（囲碁は）人類の考え得るもつとも面白いゲームだ」

「碁は、知能と人間性を発達させるすばらしい教育的手談である」

「（囲碁は）人類の考え得るもつとも面白いゲームだ」

「碁は、知能と人間性を発達させるすばらしい教育的手談である」

「（囲碁は）人類の考え得るもつとも面白いゲームだ」

「碁は、知能と人間性を発達させるすばらしい教育的手談である」

瀬越憲作

細川千仞

向井一男

木谷実

呉清源

坂田栄男

橋本宇太郎

橋本昌二

梶原武雄

安倍吉輝

依田紀基

鄭壽鉉

笠井浩二

Q42 囲碁の格言・ことわざは？

テクニツクに関するものはむろんのこと、対局中の心得から駄洒落にいたるまで、古今の囲碁格言は少なくありません。判明しているだけでも五百以上にのぼりますが、基本的なものに限りました。

詳しくは「囲碁の文化史」(水口藤雄著、日本棋院出版部刊)を参照してください。

<p>アキ三角は愚形の見本 厚みに近寄るな 厚みを地にするな 石取つて碁に勝てず 石はカラんで攻めよ 板六は生き</p>	<p>三目の真ん中は急所 死はハネにあり 弱石つくるべからず スソアキ囲うべからず 攻めるは守るなり ツケ切り一方ノビよ 敵の急所は我が急所 天王山を逃すな 二子の頭は見ずハネよ ヘコミに手あり 毎手三思して打つべし モタれて攻めよ 要石捨てるべからず</p>
--	--

Q43 おもしろ術語・用語は？

ここでは宇宙・人体・動物についての術語・用語をえらびました。家族の皆さん、お弟子さんたちに披露して、煙にまいてみてはいかがですか。

<p>宇宙に関する言葉 宇宙流・アポロ流・星目・四角星・天元</p>	<p>体に関する言葉 頭・目(眼)・目算・耳・耳の急所・小ピン(鬢)・鼻・鼻ツケ・アゴ(顎)・首を出す・肩ツキ・指運(ゆびうん)・腹ツケ・ヘソ(臍)・あぐら・身攻め・身を食う・肉付き・死に体</p>
--	---

動物に関する言葉

イタチの腹ツケ・犬の顔・ケイマ(桂馬)・烏鶯・鬼手・カニ足・カニの目・カニバサミ・亀の甲・三羽烏・三雁行・木野狐(ぼくやく)・キリンの首・サルスベリ・タヌキの腹つづみ・鶴の巣ごもり・鶴翼の陣・トンボ(形)・猫の顔・馬の顔・尻尾(抜け)

Q44 囲碁から発した日常語は？

多いと思えば多いでしょうし、少ないと思えば少ないかもしれません。知りうるかぎり羅列してみました。新聞・雑誌・テレビなどでも結構、使われていることに気がつきませんか？。

兄弟分の将棋にかんしてはよく分かりませんが、囲碁と似たようなものでしょうか。

読者各位がお気づきの点（左記以外の情報や語源などについて）がありましたら、編集部あてにお寄せください。

囲碁から発した日常語

悪手・一目置く・一手・次の一手・打ち込み烏
鷲・岡(傍)目八目・角番・鬼手・奇手・局面・
玄人・黑白・形勢判断・結局・後手・碁盤縞・
碁碁・終局・終盤・定石・勝負手・勝負所・序
盤・素人・捨て石・先手・駄目(ダメ)・中盤・
手抜き・中押し(なかおし)・ハメ手・布石・妙
手・名人・八百長・ヨセ(寄せ)

*スペースの都合で(使用例)は割愛しました

Q45 『囲碁殿堂資料館』が完成？

昨年11月15日、日本棋院の地下1階にオープンしました。日本棋院創立80周年を記念して創設されたもので、囲碁界としては待望久しい施設でした。

しかしながら、今は亡き利光松男前理事長にかくも立派に完成した雄姿をご覧いただけなかったのが、とても残念です。

これによって、囲碁の歴史や文化の厚み、そして多くの碁界情報が共有できることになりました。皆さまとともに今後の充実を期待しましょう。



開館 午前11時

閉館 午後5時

*入場は4時半まで

休館 月曜日

年末年始

入場無料

囲碁史略年譜

西暦	年号	囲碁事項
前24世紀	堯	起源伝説「堯造囲碁、丹朱善之」 「博物誌」、「堯舜教愚子也」 「中興書」などの伝説がある
前16～前11	殷	甲骨文の中に「碁」の文字（地名説？）あり
前627	戦国	「君主を視ること弈棋に如かず」 「春秋佐氏伝」
前520	春秋	「終日飽食して、心を用ゆる所なくば、難しきかな。博奕なるものあらずや、之を為すは猶已むに賢れり」 「論語」（孔子）
前180	前漢	「囲碁は或る者は兵法の類なりといふ」 「新論」（桓譚）
182	後漢	王族の墓から17路5星の石盤出土。 （1952年、河北省望都市）
595頃	隋	隋代青磁盤（隋の將軍・張盛の副葬品、19路5星、小型盤）1959年、河南省安陽から出土
636頃	唐	「倭の国人、碁博、握槊、樗蒲の戯を好む」 「隋書・倭国伝」
641	百濟	義慈王から藤原鎌足に碁石と碁石入

661	和銅5	これが贈られる「国家珍宝帳」 日本初の「碁」の文字初見「古事記」
712	霊龜	碁石浜の記述「常陸風土記」 「出雲風土記」
716	天平	国史に初の囲碁の記述「続日本紀」
738	天平10	聖武天皇遺愛の棋具（木画紫檀碁局など）正倉院に献納
756	天平勝宝8	「僧尼、音楽および博戯、樗蒲をなすは百日苦役す」 「養老律令」僧尼令
757	天平勝宝9	「碁師」の文字初見「万葉集」
759頃	天平宝字3	天覧碁の記述「続日本後紀」
833	天長10	「碁聖」（寛運）の呼称「花鳥余情」
900頃	延喜	「群書類從」
1000頃	長保	「枕草子」（清少納言）に囲碁の寸評
1007頃	寛弘4	「源氏物語」 「紫式部日記」（紫式部）に囲碁の描写あり
1104頃	北宋	現存最古の棋書？ 「忘憂清樂集」（李逸民編）成る
1349	元	「玄玄碁經集」（晏天章、嚴德甫編）成る
1350	観応1	「徒然草」（吉田兼好） 囲碁の寸評
1530	明	日中共同著作「適情録」（20巻）成

1582	天正10	6月1日(本能寺の変前夜)、信長御前で日海・利玄局で三コウ局現る? 『爛柯堂棋話』(偽作説濃厚)
1585	天正13	「11月、秀吉が御前試合を開催。日海が優勝、緑米四石の朱印を受ける」 【坐隠談叢】
1587	天正15	「碁打ちの本因坊(算砂)駿河に下る。家康公囲碁を数寄給う間、日夜碁あり」『創業記考異』
1592	文禄1	「本因坊算砂、権大僧都に任せられ、昇殿を許され、御座所に於いて碁技を天覧に供し奉れり」『坐隠談叢』
1607	慶長12	初の棋書(版本)『本因坊定石作物』(算砂編)
1612	慶長17	「本因坊、利賢、宗桂(将棋)五〇石五人扶持。道石(道碩)五〇石、(安井)六蔵三〇石、春知、仙重(角か)、算碩二〇を与える」『伝信録』
1626	寛永3	中村道碩、安井算哲(一世)が江戸城で対局。御城碁の濫觴説『御城碁譜』
1662	寛文2	徳川幕府、碁・将棋衆を寺社奉行の所屬と定める『徳川実紀』
1682	天和2	本因坊道策、琉球の浜比嘉親雲上(四子)と対局、上手に二子(三段)の免状(初の国際免状)を与える
1698	元禄11	寺社奉行、御城碁の「下打ち」制を定める
1712	李朝	初の順将碁(朝鮮式事前置石法)の記述『老稼斎燕行録』
1716	享保1	寺社奉行、御城碁の対局日を11月17日に定める
1727	享保12	寺社奉行、碁方に「碁・将棋の事蹟調査を命じる」
1737	元文2	「碁将棋名順問題」発生、大岡越前守の裁定により、従前どおりの順位が確認される
1778	安永7	横関伊保(17歳)、女流初の初段に入品
1790	李朝	韓国初の囲碁論文『弈棋論』(李徳懋)成る
1835	天保6	赤星因徹・本因坊丈和「吐血の局」打たれる
1842	天保13	御好碁(御城碁)始まる
1846	弘化3	井上因碩・桑原秀策「耳赤の局」
1862	文久2	御城碁沙汰止みとなる
1871	明治4	東京府庁、家元四家に対し家禄奉還

1878	明治11	を命ずる(俸禄打ち切り)
1879	明治12	「郵便報知」(新聞) 碁譜初掲載 囲碁結社「方円社」創設(社長、村 瀬秀甫) 初の囲碁専門誌「囲碁新 報」創刊
1881	ドイツ	O・コルセルト、初の欧文棋書「碁 の理論と実践」著す
1883	明治16	村瀬秀甫・三戸与彰初段(三子) 郵 便碁打たれる
1899	明治32	欧米初の「囲碁クラブ」オープン (ユーゴスラビアのプーラ)
1902	明治35	碁石製造機発明(大阪、方円商会)
1904	明治37	囲碁通史「坐隠談叢」(安藤如意編) 出版
1906	明治39	初の英文入門書「THE GAME OF GO」発行(A・スミス)
1911	明治44	初の個人打碁全集「本因坊秀栄全集」 発行
1914	大正3	「爛柯堂棋話」(林元美編) 発売
1920	大正9	欧米初の囲碁雑誌「Deutsche Go Zeitung」(B・リュエゲル) 創刊
1922	大正11	持時間制・総互先制(コミ4目) 採 用(裨聖会)
1924	大正13	7月17日、碁界合同して「日本棋院」
1925	大正14	創立 日本棋院機関誌「棋道」創刊
1926	大正15	「爛柯」(囲碁クラブの前身) 創刊 院社(日本棋院・棋正社) 対抗戦開 始 日本棋院会館オープン(東京・ 麹町区永田町)
1927	昭和2	日本棋院大手合(東西対抗第1回) 開始(2004年中止)
1928	昭和3	呉清源少年(14歳) 来日。翌年、飛 び付き三段を許される
1930	昭和5	欧米囲碁留学生、F・テューバル (ドイツ) 1年間研修滞在
1933	昭和8	「囲碁革命 新布石法」(木谷実・呉 清源・安永一共著(平凡社刊))
1934	昭和9	初の「囲碁年鑑」(平凡社刊)
1936	昭和11	国際電報碁(日本ドイツ) 鳩山一 郎対F・テューバル
1938	昭和13	本因坊秀哉名人、引退記念碁(木谷 実七段・先5目勝ち)
1939	昭和14	欧米初の囲碁大会「第1回ドイツ囲 碁選手権戦」開催
1945	昭和20	「本因坊戦(本因坊名跡争奪・全日 本専門棋士選手権戦)」開始 本因坊戦(8月6日、第3期第2局、 橋本昭宇・岩本薫局) 原子爆弾の余

1971	1968	1964	1963	1961	1960	1959	1957	1955	1954	1950	1949
昭和45	昭和43	昭和39	昭和38	昭和36	昭和35	昭和39	欧州	昭和30	昭和29	昭和25	韓国
日本棋院市ヶ谷本館落成	「棋道賞」創設	日本棋院より皇太子（現天皇）に碁盤・碁石一組を献上 「秀哉賞」	「大倉賞」創設 坂田栄男九段、七大タイトル独占。年間30勝2敗を記録	坂田栄男九段、29連勝達成	高川秀格、本因坊戦9連覇達成	女流アマ本因坊戦開催	第1回ヨーロッパ・ゴ・コングレシツキム王国ナムギヤル皇太子（当時）来日、伊予本桃市六段にチベツト碁法（17路13星）を披露 第1回	第1回全日本アマ本因坊戦開始	日本棋院中央会館（現八重洲囲碁センター）オープン	総本部発足	波を受ける 趙南哲「漢城棋院」創設 大手合制初の九段、藤沢庫之助（朋斎）昇進 関西棋院、独立宣言 日本棋院関西

2000	1999	1998	1996	1992	1991	1990	1989	1987	1980	1979	1977	1976	1973
平成12	平成11	平成10	平成8	平成4	平成3	平成2	平成1	昭和62	昭和55	昭和54	昭和52	昭和51	昭和48
M・レドモンド、欧米人初の九段内	「月刊碁ワールド」発刊（「囲碁クラブ」誌の誌名改題。「棋道」誌休刊）	「ヒカルの碁」連載（週刊少年ジャンプ誌）開始	「エンデバー号」船中で囲碁の対局	坂田栄男名誉本因坊「文化功労者」	平成版「道策全集」刊行	第1回国際アマチュア・ペア戦開催	日本初の「囲碁切手」（二種）発売	趙治勲九段、グラントスラム達成	第1回少年少女囲碁大会開催	第1回世界アマチュア囲碁選手権戦	「週刊碁」創刊	第1期名人戦（朝日新聞）開始	趙治勲、大手合33連勝達成

参考文献

- 【爛柯堂棋話】 林元美編 一九七八 平凡社
【坐隠談叢】 安藤如意編 一九七三 新樹社
【囲碁百科辞典】 林祐編 一九七二 金園社
【碁の発掘】 安永一 一九六七 人物往来社
【今昔物語集】 一九五九 岩波書店
【古今著聞集】 橘成季 一九六四 吉川弘文館
【論語】（孔子） 一九九四 岩波書店
【孟子】（孟子） 一九九四 岩波書店
【隋書・倭国伝】 一九八五 岩波書店
【本山寂光寺誌】 日心 一九三七 寂光寺
【徳川実紀】 一九六四 吉川弘文館
【御城碁譜】 一九四六 御城碁譜配布委員会
【囲碁革命・新布石法】 木谷実・呉清源・安永一
一九三三 平凡社
【囲碁雑学ものしり百科】 一九八一 日本棋院
【囲碁の文化誌】 二〇〇一 日本棋院

囲碁雑学手帳

日本棋院編

月刊碁ワールド1月号付録

発行日 平成17年1月1日

発行所 財団法人日本棋院

東京都千代田区5番町7-2

(〒103-8668)

田碁雜学手帳